

## 会長挨拶

全国学校飼育研究会の目的を振り返り、そして意識した実践研究を

宮下英雄

昨日の激しい雨が嘘だったかのように快晴に恵まれ、安堵したところです。参加の事前登録や受け付けからの情報ですと、北は北海道から、南は九州から、全国各地より全国学校飼育動物研究会第4回研究発表会に、多くの教育関係者、獣医師の先生方、教育行政などでご活躍の諸先生方のご参会をいただき開催できましたことを大変嬉しく思っております。今回も、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センターと共催して今日の日を迎える事ができました。また、これから教職を目指している学生が多数参加されたことは、子ども達に明るい光を照らしてくれる実践者となられることと期待しています。また、今回の発表会には、大阪府立農芸高等学校より7名の高校生の皆さんが、日頃の「ふれあい動物部」の活動を報告してくださいました。みなさんの情熱とエネルギーと真摯な姿に、日本の将来に勇気と希望をあたえてくださいました。

これもひとへに、日本の子ども達を、すこやかで、たくましく、しかも、生きる力をたずさえた心豊かな子ども達へと成長を願う関係各位のご努力の積み重ねと情熱があったからだと考えます。

この研究会も発足して3回目のお正月を迎えました。この時期に、改めて発足の背景や課題等を振り返りながら、確認していくことが大切と考えています。それは、学校組織の専門性、関係諸機関との連携、そして子どもを取り巻く環境の変化という3つの側面です。

一つ目の側面です。各学校には、ウサギやニワトリ・チャボが飼育されています。飼育することを通して、動物愛護や生命尊重の心を養う必要性を認識しています。しかし、専門的な知識や経験が少なく、飼育や管理に関する問題を沢山かえているのが現状です。

そのためにも、専門家である獣医師の先生方のご支援をいただきたいという現場の強い願いや思いがあるということです。また、その支援の方策の一つとして、学校の校医に準じる形で教育委員会から任命される獣医師の設置を強く求めています。各都道府県や各地方自治体の教育委員会の中では、すでに設置されているところもございりますが、まだまだ設置状況が少ないのが現状です。

二つ目の側面です。国内での鳥インフルエンザの発生にともない、学校で飼育されているニワトリ等もその感染の恐れがある危険な存在であるとの不安から、各学校やPTA、教育委員会からも子どもを飼育舎に近づけさせない等の対策を講じた所が多かったということです。そのため、今まで可愛がって育てていたニワトリ等が餓死状態で死に追いやられてしまったとい

う悲しい出来事が続きました。鳥インフルエンザに対する誤解が、更に多くの誤解を助長したということです。

このことは、まさに正しい認識のもとに対応策がなされなかったことにあると考えられます。更には、保健所、医師会、獣医師会等の関係諸機関との連携を検討する必要があると考えられます。

三つ目の側面です。児童をとりまく生活環境や社会環境、自然環境の変化から、生命尊重や死に直面する機会、飼育や栽培体験が極めて少なくなり、生命の大切さや有限さ等を理解する機会が失われ、生命を軽視する傾向が見られてきているということです。

その一方、ゲームやTV、雑誌等を通して、生命の尊さに対する感覚が希薄化してきているという危機報告がなされています。その危機感の中で、子どもを取り巻く事件において、最近ではかつて経験したことの無い猟奇的な事件や残酷性のある事件が続いています。その事件の背景については、多様な側面から各専門家が分析し、その対策も講じられて来ています。しかし、これらの対策は必要であっても、モグラたたきゲームに等しいと虚しく感じられてしまいます。

もっとも大切なことは子ども達に「命の大切さ」「生命尊重」の教育を強く推進していく事が必要かつ重要であると考えからです。そこに生命を大切にすることというのを体験的に、継続的に学ぶことの価値を見いだすことができる動物飼育の重要性が存在するとともに、更に目的を明確にし、子どもの人格形成や思いやりの気持ち、豊かな心の基礎を培う動物介在教育(Animal Assisted Education) AAEの実践が求められています。「子ども達の心を動かす動物飼育」を第4回のテーマに掲げたのも然りです。

以上の側面をとらえ、本研究会は、学校における動物飼育や動物介在教育の子どもへの影響や飼育のあり方についての研究実践成果の発表、獣医師会を交えた飼育支援ネットワークのあり方の検討等を行い、子ども達の健やかな成長と生命尊重の心や態度の育成を図って参りたく研究活動を推進したいと考えます。

最後になりますが、ご講演やパネラーとしてご登壇頂きました文部科学省教科調査官杉田洋先生、東京都教育委員会指導主事田中康雄先生、西東京市立中原小学校藤平洋子校長先生をはじめ、口頭発表やパネル発表を通して実践事例をご提供して下さいました皆様方に感謝を申し上げます。

(聖徳大学人文学部児童科学科教授)